

第二章 興亜会について——創立と活動——

狭間直樹

(京都市立大学名誉教授)

興亜会が創立されたのは、明治十三(一八八〇)年二月のことである。明治十三年といえ、国内的には、西南戦争が終わり自由民権運動の高揚をみせはじめており、対外的には、日清両国間にはいわゆる「琉球処分」問題での対立がつづいていた。さらに視界を広げるなら、フランスの安南(ヴェトナム)への進出が、しだいに激しさをくわえつつあるときだった。

明治十三年二月十三日、ほとんど実体らしきものをともなわなかった振亜社が興亜会に衣替えした。会場は、久保町の売茶亭。売茶亭とは、字面からは想像しにくい、が、「西洋酒楼」だという⁽¹⁾。参会者は十余名、会名の変更を決め、長岡護美を会長、渡辺洪基を副会長、曾根俊虎・金子弥兵衛・草

間時福^{ときふく}を幹事に選挙した。また、曾根が準備した立会の趣旨と会則等を取捨して「仮規則」とした。以後、入会者の勧誘にはげみ、三月九日の第一回会合までに、会員は百名をこえた。事務の繁忙をさばくべく、幹事ポストを臨時に二つ増やして宮崎駿児・佐藤暢をそれに任じている。その間の三月一日に、会長・副会長・五幹事があつまって「本会規則」を制定している⁽²⁾。

その規則は『興亜会規則』⁽³⁾と題するパンフレットの形で刊行された。なかには会の創立趣旨にあたる「興亜会設立緒言」と、規約にあたる「興亜会規則」とが収められている。そのうちの「緒言」は、曾根の起草したものにくらべ、対象を「支那」からアジアの諸国に広げるなど、いくつかの点で

違ったものになったという⁽⁴⁾。

「興亜会設立緒言」に盛られた思想は、きわめて興味深いものである。それは、まず、アジアの置かれた情勢をこう捉える。

窃かに方今の亜細亞洲の大勢を推しみるに、国は相い依らず、人は相い輔けず、萎靡^{なみり}尪^{やう}苟且^{こくじ}自安す。此の時に当り、全洲の志士、孰か慨憤^{がいふん}せざる者あらん哉。夫れ歐美諸洲の能く隆盛を致すは、皆な彼此に言語相い通じ、情事諳^{あはれ}く練するに由る。故に緩急あれば以て互相に維持すべきなり。嗚呼、我が全洲の諸国をして此くの如くならしむれば、則ち衰頹^{あひた}を振興し、而して歐美諸洲に比隆すること、豈に其れ難からん哉。

ここでは、近代における欧米のアジアにたいする侵攻の全体図が述べられるとともに、彼らの優勢が「言語相い通じ、情事諳く練する」相互提携関係の確立にあるとする分析が提示されている。もちろん曾根とて、欧米諸国間の相互対立・敵対関係を知らないわけではない。ただ、アジアに対するときには、自分たちの内部矛盾を克服して立ち向かってきている、という現実を指摘しているのである。それを可能にしているのは、言葉が通じ事情が分かり合っているという関係にある。ゆえに、そのような関係を確立することにより、こちらアジアの振興を実現しよう、と呼びかけるのである。

ところで、アジアでまともに独立しているのは本邦(日本)と「支那」だけである。朝鮮・安南・暹羅^{シエム}は、名は独立でも実体はそうでなく、緬甸^{ビルマ}・天竺^{インド}などは歐洲諸国の直接支配^{すくひ}下にあるという嘆かわしい現状なのだから、「此れ興亜会の亟かに設けざるべからざる所以なり」。

そもそも日中朝三国の邦交の歴史は長く、東南アジア諸国との交際も古い。通信・貿易の関係の重大さは、欧米とは比較にならない。にもかかわらず、支那・朝鮮との交際の実状は、いままなお確固たる基盤が固まっておらず(猶未有^{なほなほ}有^あず)、東南アジア諸国とは論外である。このような状況のもとで、われわれはなにを為すべきか。

今日に在りての急務は、亞洲諸邦の士を聯ね、協合共謀し、正道を興して衰頹^{あひた}を拯^{すく}うことなり。さすれば、則ち先ず其の情勢を知らざるべからず。其の情勢を知らんと欲すれば、先ず其の言語に通ぜざるべからず。本邦には歐美諸洲の語を能くする者は之れ有り、而して支那・朝鮮および亜細亞洲の語を能くする者は甚だ少なし。何ぞや? 校舎の設け、未だ全くは備わらざればなり。豈に遺憾ならずや。

追求されるべきは「正道を興して衰頹を拯う」という、共存共生の大目標なのである。この「衰頹」したアジアを救うには「正道」を回復すること、のちに孫文が熱心に唱えた言

葉をつかうなら、西洋の「霸道」ではなく東洋の「王道」によるべしとしたのと通底する旗印が、この時、興亜会の成立とともに掲げられたのである。

この大目標を実現するためには、当然に相互理解を深めることから始めねばならない。しかし、そのための条件がまったく整っていないのであって、欧米の言語の修得には力を入れるが、アジア諸語はそれを教える学校もない、と指摘する。このアンバランスが今にいたるも大きな影を落としていることは、周知のとおりである。

そこで、その第一着手として学校を創立し、そして伝達機構と情報ネットワークを組織しようという。東京に「支那語学」を教授する学校を創立し、「公報局」を設け「通信員」をアジア各地に送って、会員に情報を提供する。将来には、清国の上海、朝鮮の釜山等にも学校を設け、三国の人士の交流を図り、しだいに他の諸国にも及ぼすのだとして、この大目標に向けての賛同、協力を呼びかけるのである。

志士たるもの、苟も遠きに馳せて近きを遺るの悔い無く、ご光臨して本会に同盟くださされよ。其の事業に賛成し、以て其の速ばざるを匡さるれば、亜細亜全洲の大勢を振興するは、其れ庶幾き乎。

明治十三年三月一日

興亜会

この創立趣意書は堂々たるものと言ってよいが、全十七条

外地勤務で日本を離れたためはずれ、第三位を佐藤と宮崎が分け合った形になった。おそらく幹事選挙は三名連記だったはずである。

この日、議員の選挙も行われた。定数は六人、選ばれたのは、上から大倉喜八、宮島誠一郎、桂太郎、大久保利和、伊集院兼良、鈴木慧淳だったが、桂が公務多忙で辞退、繰り上がった榎本武揚も同じ理由で辞退、つぎの小牧昌業、鄭永寧が同票（十二票）だったため、起立により多数者を確認し小牧を当選者としている。大久保利和は大久保利通の嗣子である。正副会長には地位の高いものが選ばれているが、それにしてもこのような会の指導者を選挙で選ぶというのは、自由民権の風潮の一反映であろうが、まったくもって新しいやり口だったのである。

会長の長岡護美（別名長岡監物、一八五〇—一九〇六）は、肥後藩主細川侯の第六子である。副会長の渡辺洪基は、武生藩の学者の子、福沢門下で蘭学、医学を修め、明治十二年に学習院長となっている。興亜会の会合（会合）が学習院でたびたび開かれたのは渡辺の關係からである。ちなみに、翌年の選挙で、会長は伊達宗城だったが老年を理由に辞退したため、次点の副島種臣が代わって就任した。伊達宗城（一八一—一八九二）は旗本の子、のち宇和島藩主、日清修好条規締結に貢献した。副島種臣（一八二八—一九〇五）につい

からなる「興亜会規則」もなかなか完備したものだった。第一条では「本会は亜細亜諸邦の形勢事情を講究し并せて言語文章の学を修得するを以て其事業の目的とす」と会の性格を規定している。会員は「創立員」と「同盟員」の二種からなり、会費はともに月一円だが、前者が創立費十円以上を収めるのにたいし、後者は入会金が二円と差がある（第三条）。役員は選挙で選ばれる。すなわち「毎年四月第一土曜日の大会に於て、会員一般の投票を以て創立員中より会長一名、副会長一名、幹事五名を選挙す」（第六条）。また、創立員が多くなると、議員（十二名）を設けることにしているが、それも選挙である（第八条）。被選挙権があるのは創立員だけが、組織の役員は選挙で選ばなければならない、という時代になっていたのである。

四月十日（第一土曜日ではないが）、第二回会議で実際に選挙が行われた。会長は伊達宗城（四十八票）、副会長は渡辺洪基（三十八票）、幹事三人（元の数に戻したのだから）は金子弥兵衛（四十票）・草間時福（三十八票）・佐藤暢（十八票）、次点宮崎駿児（十七票）であった。当日の参会者として記されているのは三十九人が正しいとすれば、票数からは分らない。前任の長岡がはずれたのはオランダ公使に任ぜられたためだが、それ以外は再任である。幹事は、曾根が

ては、いうまでもないだろう。

げんに、隣国の清国では、四半世紀後の変法運動でも、さらにその後の革命運動でも、投票による選挙で役職者が選ばれるというようなことはなかった。辛亥革命の直前、諮議局の選挙が行われ、また中華民国が成立して衆参両議院の選挙も行われるが、民間の会の役職選挙の目立ったもののあることを知らない。かの孫文が民主的な会議の持ち方を真剣に考えて「会議通則」をつくるのは、一九一七年のことなのである。

前述したように、お披露目的な第一回会議は三月九日の午後三時から神田錦町の学習院で開かれた。当日、長岡会長は事故あって欠席したが、渡辺副会長以下、創立員三十五人、同盟員二十人、計五十五人が出席した。そのなかには、重野安繹、中村正直らの文化学術界の名士の顔も見える。けっして大きな組織とは言えないが、かなりの社会的基盤を持っていたらしいことは推測されてよい。

その日、欠席の会長を代理して祝詞を述べたのは鍋島直大であった。それは通り一遍のものであったのか、「公報」での紹介は全文が以下のとおりの、簡単なものである。

抑も此の協会を立つる由縁の者は何ぞや。亜細亜諸国をして交際を親睦にし、情勢を洞察し、欧羅巴各国の爲す如く互に利害痛痒を感触する処あらしめんとするに基つ

くものなり。蓋し今日興亜会の創立あるは、全く亜細亜文明の進歩せしを表明するものと謂ふべし。爰に其設立を祝して、併せて向後、盛大に至らんことを希望す。

眼を引かれるのは、興亜会の創立を「亜細亜文明の進歩せしを表明するもの」としている点くらいである。

ついで、副会長渡辺洪基が立会趣旨を、幹事草間時福が本会創立の歴史を、そして「支那欽差大臣何如璋」公使は出席できないが、「本会設立を喜んでくれた」ことを、入会交渉に当たった幹事曾根俊虎が述べた。

渡辺は「立会の主旨」をこう「演説」した。欧米は戦争し競争しながらも「同族、同文、同教の一致団結を維持」してその「利益」をうけている。アジア諸国「日本、朝鮮、満州、支那、安南、緬甸」も「人種相同じく文教相殊なら」ないのだから、欧米諸国にまなんで一致団結して対抗し、「将来、地球上の人世社会の一大幸福」をもたらしたい。そのためには、日清両国の志士の結合、「支那語学校」の設立から着手し、しだいに広げていくべきで、本会を創立したのは、そのためである。

ちなみに、「演説」の語も対等の聴衆への意見表明という点で、「選挙」が対等の人格を前提にした意思表示方法であることと同質の意味において、近代国民にふさわしい多数者にむかっただけの意見表明の方法なのだった。福沢諭吉もさかん

に提唱したもののだが、自由民権運動とともに定着していったのである。

渡辺演説で、アジア諸国として緬甸ビルマ以東しか挙げないのは、話の勢いのだろうが、東アジアが中心で当然である。ペルシャ等、西アジアのことも、必要に応じて取りあげられている。「人種相同じく文教相殊ならず」とするのは、対ヨーロッパということで大雑把にくくったまでのことだろう。付言すれば、「清国」といわず、「満州」と「支那」に分けていることには、その真意のほどはわからないが、留意しておいてよいだろう。ただ、この時期には「支那」の語に蔑視感はまったく含まれてない。

ここで、注意せねばならないのは、語学の修得に力点を置いていることである。今の常識からすれば、何をわざわざ、ということになるが、維新後わずかに十年あまりでしかないことを考えれば、やはり驚いてよい。というのは、その後の日本におけるアジア諸語への不当な軽視と、その裏返しとしての日本の優越の強調・強制的歴史とあまりにも違いすぎるからである。明治初年の日本人は、近隣諸国と接する姿勢において、まともな感覚をもっていたのである。

この問題を第一回会合で真っ正面から取り上げたのは、重野安繹である。かれはこう言う。「漢学」を修めるには「正則」を以てせねばならぬ。「正則」とは「その音韻に熟しそ

の言語に通ずる」ことである。わが国では漢文を「我国文章の髄」としてきたが、江戸時代いらい疎遠となった。今や外交開け「正則」の授業を行えるようになったのは「無限の幸福」である、と。

外国語を、外国語として「音」から学ぶこと、それが言語学習の本来の姿であることは、今では常識になっている。しかし、かつての知識人は漢文の読み書きはできても、漢語を話し聞くことはできなかった。つまり、筆談しか出来なかったのである。重野も、「余が如き、数十年漢籍を閲すと雖も、変則なる故に言語に通ずるを得ず」と自己批判しているのだが、それは「昨年、清客王紫詮〔王韜〕東京に遊び、暫く敝寓に居を同じ」くし「日夜相接すれども、互にその言語を曉得」できなかったという痛切な経験を踏まえたものだった。

もちろん、長崎通事のように「話音を解するのみ」で「文学」に乏しいのも真の交流には不十分である。「話音に熟し、経史諸書も自在に音読」できるようになってこそ、「両国の人情世態互に相通」することができるし、そうやってこそ、

「爾後、我東洋の国勢を振起し、欧米各国の上に出でしむる」ことが可能となる。興亜会の本来の目的はここにあり、それこそ自分の切なる希望なのだ、と重野はいう。

王韜については後述するが、来日時重野安繹との関わりを簡単に述べておこう。

明治十二（一八七九）年に、王韜は来日した^⑧。上海を發つて長崎に着いたのが五月二日、神戸・大阪・京都・横浜を経て、五月十八日に東京に着いた。東京を離れるのが八月二十三日、横浜から乗船し、神戸・長崎をへて八月三十一日に上海に帰り着いた。百日あまりの滞在である。招請を發起したのは栗本鋤雲で、その發議に重野安繹・中村正直・亀谷行・岡千仞らが賛同して実現の運びとなった。その経緯は、『扶桑遊記』に付されたかれらの序跋にみえる。要するに、『普法戦記』の著者として名声きこえ噴々たる、西洋の事情にも通じた当代きっての学者、として招聘に白羽の矢がたったの来日だった。

王韜にたいする高い評価は、岡千仞の魏源を「つぐもの」とか、重野安繹の魏源を「超えるもの」といった評価に、端的に見てとれる。それにたいし、王韜は、魏源のころには洋人と深い交際ができなかったから、その「心の奥底」まで理解することはできなかった。しかし、魏の「夷の長技を師とする」の説は先覺的だった。惜しいことに、以前には口にするだけで実行せず、今は実行してはいるが表面だけなのが問題だ、と答えている^⑨。

重野宅に住むことになったのは、旅館の部屋があまりに狭く窮屈なのを見て、重野の方から申しでて、王韜がその厚意を受け入れ、六月六日に引越したという。東京到着時に築

地の精養軒に泊まったことは確かだが、重野が窮屈と感じたのがどのような部屋かは分からない。ただ、料理人を従えての来日だったから、いまのわれわれが考えるような「旅行」とはまるで違ったものだったことは、念頭に置いておかねばならない。

重野安繹の略歴をごく簡単に触れておく。一八二七一—九一二、号は成斎。薩摩の人。江戸の昌平黌では中村正直と同窓である。『万国公法』の和訳にたずさわり、明治八年、修史局に入る。明治十二年、東京学士会院創立とともに同会員となり、六月、同院で「漢学宜しく正則一科を設け少年秀才を選び清国に留学せしむべき論説」を発表、訓読を廃し音読による水準の向上を提唱した。明治十七年、東京大学教授、明治二十二年、史学会初代会長。実証的な歴史学の確立に努力し、名教からの独立をとえ、神話的な虚構をつぎつぎと暴いたので「抹殺博士」と渾名された。

重野安繹は、明治の時代精神ともいうべき実証主義を歴史研究の分野にもちこみ、主観派史学にたいする客観派史学を樹立して歴史を科学にまで一大変革した功労者なのである。日本に近代歴史学を確立したかれの貢献は顕著なのだが、その功績は過渡期の人としてのそれで、内藤湖南・狩野直喜・服部宇之吉らの登場のために地均しをした問題提起者であったとも位置づけられている。要するに、日本近代歴史学の

創立者の一人なのであった。その学問は、黎庶昌により「中・東・西、三者の長を剖せんと思ふ」と高く評価されているが、それはけっして外交辞令ではなかった。

外国語における「正則」の学習を主張した重野にたいし、興亜会幹事となった『朝野新聞』社員の草間時福は論説で「世人にして亜細亜連衡の要なるるを感ぜば、宜しく支那の国勢を知らざる可からず、支那の国勢を知らんと欲せば、先づ支那語学の門より入らざる可からず、支那の語学は、豈に一日も之を等閑に附す可きものならんや」と、その緊要性を主張していた。これが興亜会の創立に合わせたキャンペーンだったことは、一見して明らかである。

実際、興亜会は「創立緒言」にも高らかに歌いあげたように、アジアの言語の教育に取り組んだ。まず最初は「支那語学校」だが、会創立直前の明治十三年二月七日に曾根俊虎の名義で申請、東京府の認可を受けて、はやくも同月十六日には芝の榮寿寺で開校している。この語学校は比較的順調に発展したが、二年後に文部省管轄東京外国語学校に「依頼」と決めて、明治十五年五月十四日に閉校した。要するに、草分け的存在なのである。また、大阪・神戸・熊本にも「支那語学校」をつくったが、大阪のばあい、先年に開設されていた東本願寺のそれを、教師ともども引き継いで出発したものであることに注意をひかれる。

この学校について一つだけ記しておこう。そのカリキュラムには、語学以外に「漢学」と「訳書洋算」があり、後者の「輪講」のテキストとしては、中村正直訳の『自由之理』などがもちいられた。そして、教師の吉田義静が言うように、斯文会（明治十三年六月創立）は聖賢の教えを理解すればよいが、興亜会は言葉を身につけてさらに「興亜の事実上に従事」する必要がある。そのような「亜細亜を興す」実践は、たんにアジアのためになるのではなく、またヨーロッパのためのものでない。それはまさに古人のいう「隣に善くする（は）国の宝」であり、「四隣を以て国を守る」というもので、これこそ興亜の真精神なのだ。つまり、アジア主義とは自国の安寧が四周の国々との良好な関係によってなりたち、アジアの興起発展が欧米との世界大の共存共生につながることを見据えたものであったから、ミルの自由論も学ばねばならなかったのである。

このような基盤の上に、さらに一步をすすめたのが、広部精の試みである。明治十三年十月二十日の会で、広部は会報を漢文により編集することを提案し、認められて第十二集より編修を担当した。第十二集から表紙裏には、「本局告白」がかかげられた。本局とは、興亜会の公報局、すなわち『興亜会報告』の編集刊行の担当当局である。その第一条には、こう宣言されている。

一 本報告は向に和文を以て事を録す。外邦は未だ尽くは通ずる能わざれば、則ち本会の意を伝うる所以に非ざるなり。因りて議すらく、今後は改めて漢文を用い、以て広く亞洲各国士人の覽を便にし、敢えて區別する所有ること非ざらんことを。

つまり、アジア各国の士人に読んでもらうために漢文で編集することにする、というのである。しかも注意されるべきは、広部のこの考えが「ヨーロッパが英語を『通話』として発展できたことに鑑みて、東アジアでも『通話』である官話の活用による連携をはかるべし」との考えに支えられて提起されていたことである。官話とは、言葉の違いの大きい中国において、標準的に通用していた言葉で、北方の北京官話、江南の南京官話、内陸部の西方官話がその三大系統だったという。

この広部の構想は、けっしてたんなる復古調だったのではなく、東アジアを近代世界に適応的に再生させようとするための、斬新な企図を内包したものだ。しかも、広部は自分たちの教科書『亜細亜言語集』をウエードの『語言自選集』によって作成していた。つまり、広部のいう「官話」は北京官話であって、あたかも国際政治の関係から北京官話が中国全体の標準語の地位を占める過程と照応していたのである。この全て漢文との編集方針は、それでは余りに不便という

意見が出て、第十四集から「和文雑報」欄が設けられるが、表紙裏の「本局告白」はその後も一貫して、上掲のものと同文のものが掲げつつけられる。つまり、「和文雑報」欄を地域版として設けるが、全域版は「官話」との精神はなら変わらないことを表明しつつけたわけだ。それも、後身の『亜細亜協会報告』においても、なお基本的に同文のものが掲げつつけられていることからして、広部とその周辺のアジア主義者たちが、「通話」の確立を真剣に考えていたことは、十分に見てとれるのである。

興亜会は、当時の時流にかなったのか、当初、相当の発展をみた。十余名で発会したのが、一カ月ばかり後の第一回会合時には百余名、一年後には三百余名（創立員百六十三名、同盟員百四十四名）にまでなった^④。その間、神戸（第一分会）、大阪（第二分会）、福岡分会（第三分会）もつくられた。東京本会会員百五十五人の職業別分類は、黒木彬文氏によれば^⑤、第一位が外務省二十八名、第二位が海軍省二十名、第三位が内務省十五名、ついで第四位に新聞人と実業家各十四名、その後の第六位に興亜会語学校生徒がくるが、そのあと第七位から第十一まではまた宮内省等の役人が占めている。要するに、圧倒的に官員の比率が高く、それにジャーナリストと実業家が若干くわわった組織だった。ただ、大阪分会はさすがに実業家が多い。軍では海軍が多いのに反し、陸

軍が少ない。出身地別では非藩閥が主であるが、薩摩は大久保の關係からであろうがいくらか目に付くのにたいし、長州はほとんどいない。ただ、桂太郎が当初から、創立員で加入しているのは、桂が諜報方面の責任者の地位にあった^⑥からなのだろう。そして、清国人の会員は前述の王韜ら、二十六名が挙げられている（何如璋、張滋昉らはこの表に含まれていないから、もう少し多いことは確かである）。

注

- (1) 王韜『扶桑遊記』走向世界叢書本、岳麓書社、一九八五年、四百八頁。
- (2) 草間時福「興亜会成立の歴史」『興亜公報』第一輯、明治十三年三月十四日、四頁。『興亜公報』（第二集からは『興亜会報告』）は、黒木彬文・鱗沢彰夫編集解説『興亜会報告・亜細亜協会報告』第二巻、不二出版復刻版、一九九三年、により、復刻版書名は省略する。なお、頁数は原報告の頁数。
- (3) 『興亜会規則』は『興亜会報告・亜細亜協会報告』第二巻、二百五十九頁所収。以下、「興亜会設立緒言」、「興亜会規則」は、すべて上掲書に拠る。
- (4) 黒木彬文「興亜会、亜細亜協会の活動」（一）、『政治研究』第三十九号、一九九二年、三頁。
- (5) 「本会記事」『興亜会報告』第三集、一八八〇年四月二十一日、一頁。

- (6) 翌年の一周年会の改選では、「衆員改選の票を啓いた」結果、曾根は議員のトップで選ばれている。議員（定数十二名）は、ほかに町田実一、佐藤暢、金子弥兵衛、末広重恭、重野安繹、岸田吟香等（『興亜会報告』第十六集、四頁）。
- (7) 「会議通則」（『建国方略之三 民権初歩（社会建設）』『孫中山全集』第六卷、中華書局、一八八五年、四百十二頁。江田憲治「孫文『会議通則』の民主主義思想」『孫文と華僑』汲古書院、一九九九年、参照。
- (8) 王韜については基本的に『扶桑遊記』走向世界叢書版、に拠る。日付、序跋などを本文に示すものは、注記を省略する。
- (9) 王韜『扶桑遊記』四百十三頁。
- (10) 麻生義輝『近世日本哲学史』近藤書店、一九四二年、三百二十七頁。漢学者重野の一面は、陶徳民「重野安繹と近代大阪の漢学」『日本漢学思想史論考』関西大学出版部、一九九九年、参照。
- (11) 町田三郎『明治の漢学者たち』研文出版、一九九八年、九十八頁。
- (12) 草間時福「支那語学の要なるを論ず」『朝野新聞』明治十三年二月十七日（黒木彬文「興亜会の成立」『政治研究』第三十号、一九八三年、九十一頁）。
- (13) 「吾会記事」『興亜会報告』第二十八集、明治十五年五月三十一日、一頁。財政難を理由にしての閉校措置だが、それが表向きの理由でしかないのであると、黒木彬文氏の解説は指摘する（十頁）。

- (14) 鱗沢彰夫「興亜会の中国語教育」『興亜会報告・亜細亜協会報告』第一巻解説、二十二頁。鱗沢氏の解説は、興亜会の中国語教育が日本の中国語教育の原動力となったこと、その陸軍との関係、中国語テキストの編纂状況について、周到をきわめたものである。
- (15) 吉田義静「同会諸君に告ぐ」『興亜会報告』第七集、五頁、第八集、七頁。
- (16) 「本会記事」『興亜会報告』第十二集、明治十三年十一月十五日、一頁、二十三頁奥付。
- (17) 広部精「官話論」『興亜会報告』第十二集、五頁。
- (18) 高田時雄「トマス・ウェイドと北京語の勝利」、拙編『西洋近代文明と中華世界』京都大学学術出版会、二〇〇一年。
- (19) 「興亜会創立の歴史」『興亜公報』第一輯、六頁、「本会記事」『興亜会報告』第十五集、五頁。
- (20) 「興亜会の基礎的研究」百九十八―二百十三頁。
- (21) 佐藤三郎「日清戦争以前における日中両国の相互国情偵察について」『近代日中交渉史の研究』吉川弘文館、一九八四年、百四十頁。